

ツール9：グラウンドルール

このツールの目的

グループワークのための安心できる建設的な雰囲気づくりを行う。

このツールを使うタイミング

関係構築ステージで、メンバー同士が協力できるグループ作りが重要なタイミング。

なぜグラウンドルールを使うのか

さまざまなステークホルダーを一堂に集めるということは、さまざまな異なるコミュニケーション文化を同じ空間に集めることを意味する。グラウンドルール（基本ルール）を活用することで、MSPミーティングにつきものの苛立ちや非効率を避けることができる。よりフォーマルな枠組みの下で運営されるグループは、多くの場合、ミーティングの最中にどのように互いに関わり合うかについて、一過性ではない一貫した形で合意することで、よりよく議論を行うことができるようになる。

グラウンドルール – ステップ・バイ・ステップ

グラウンドルールが必要な場合、おそらくそのグループはブレインストーミングで自らグラウンドルールを決めることができるはずだ。だが、グラウンドルールとはどのようなものか、具体的に知りたい場合は、以下で紹介するTree Bressen による「初心者セット」を参考にしてほしい：

1. 話すときは一人だけが発言するよう、全員が気を付ける。空港で着陸待ちのため飛行機が旋回するようなものだ。もしも発言したい人が同時に複数いる場合、挙手し、指名されるまで待つこと。もしもメインの議論以外で誰かと話したい場合は、部屋から一旦出るようにする。
2. 公平性：発言したい人すべてが一度は発言するまで、特定のテーマについて同じ人に2回目の指名をしない。発言した後は、一歩引くようにする—他のメンバーの発言時間を残してあげること。
3. 建設的であれ。ポジティブで相手をサポートするような雰囲気づくりを行うこと。過去についてはしっかり認識しながらも、今後についてフォーカスすること。信義を重んじ誠実であるように努める。
4. 仮定や推論を相手に投げかけてみる。相手にさらなる情報を求める。
5. 具体的に。必要なら例を用いて、あなたが何を言いたいのかについて、メンバーが理解できるようにする。
6. 自分自身の感情や体験に責任を持つ。「私は…」という言い方をする（たとえば、「あなたの行動のせいで腹が立ちました」ではなく、「それを見たとき、私はとても腹が立ちました」という言い方をする）。
7. 現実に即し、メンバーにとって意味があるものにする。正直であれ。直截かつ親切であれ。複雑な問題を議論する。最も言わなければならないことに集中する。

一旦グループの中で一連のグラウンドルールが確定したら、ファシリテーターの役目の一つは、メンバーがそのグラウンドルールを責任をもって守るようにさせることとなる。グループの他メンバーもこれをサポートすべきであり、ファシリテーターが難しいことまですべてやってくれると期待しないようにする。特にファシリテーターが慣れていない場合は特に注意する。

グラウンドルールは、目的を達成するための手段に過ぎないことを忘れないようにすること。グラウンドルールについての議論や定義に初日（最も重要な日だ）の多くの時間を費やすのは避けること。グラウンドルールとして罰を設ける提案（「セッション中にFacebookを見たり投稿した人は歌を歌う」等）は避けるようにすること。なぜなら、このような罰は実際に課すことが難しいことが知られている上、無駄に教室のような雰囲気を生み出すからである。

ミーティング前に特定のグラウンドルールについて伝達しておくことが適切な場合もある。それにより、全

員が集まる貴重な時間を節約し、参加者の期待値を事前に揃えておくことができる。次のようなチャタムハウス・ルールは、この目的で使われることが多い特別なグラウンドルールの一例だ：「ミーティングに参加する者は誰でも、議論から得られた情報を自由に使ってよいが、誰がどのような発言をしたかを決して外部に漏らしてはならない」。このルールは、より率直な議論が交わされるよう作られたものである。

さらに知りたい方は：

Tree Bressen (n.d) Facilitation Primer.

http://treegroup.info/topics/facilitation_primer.pdf

www.chathamhouse.org.uk/about/chathamhouseule/